

青年部 だより

目覚めよ青年部!!

青年部事務局長 市川佳介

2018年全国青年対策交流集会が6月23日～25日の3日間、豊橋・シーパレスで開催され、私は大阪支部青年部として参加して、学んできました。

1日目は、鈴木勝也中央執行委員のあいさつから始まり、地震対策の話や各港での色々な問題、青年部の意識、立ち位置等についての講義を受けました。

その後に各地方での活動報告を受けました。地方港における活動を聞くと、自分たちができていないことや、やるべきことが見えてきました。

懇親会では全国の青年部の仲間たちと熱い話をし、団結を固めました。

2日目は、鈴木誠一中央副執行委員長長の講義から始まりました。



内容は全港灣創設からの歴史、港灣事業に係る法令や協定という港で働く人間なら、当たり前にならないういけない事を解かり易く噛み砕いて講義を進めていただきましたので、勉強不足のため、用語の意味も分からない僕でも理解できる内容でした。

少子化とどう向き合うのか

港の自動化の問題についても講

義を受けました。自動化による港灣合理化での労働者の減少は自分に降りかかる可能性が十分にあるし、労働者の減少は組合員の減少に直結する。しかし、技術革新に反対するべきなのか、そしてこの



少子化が進んでいる時代にこの先の労働者の減少も見えている現状があるのでとても難しい話であると感じました。

その後は、分散会をしました。テーマは「青年部のあり方、今後の活動」「全国青年部創設について」「組合離れの対策」「全国で起こりうる震災、災害について我々が考え取り組むこと」の4項目を話し合いました。

組合離れは深刻

各地方、各支部で色々考え方が違い抱えている問題も違いましたが、やはりどこでも組合離れは深刻な問題でした。仕事優先になるのはわかるが、その仕事や自分や仲間の生活を守るためにやっていることを理解してもらえないのが歯がゆいという意見があり、やはり勉強会や職場での付き合いがとても重要だと結論に至りました。

3日目は、松本耕三中央執行委員長長の講義を受けました。講義の内容は全港灣の歴史、全港灣の闘

い、政治に対しての労働運動の大切さ等の内容でした。難しい事は言わず簡単に解かりやすく講義を進めていただいたので理解して自分でも考えることが出来る講義でした。

さあ、立ち上がろう！

中央本部総括として「もっと前のめりに活動していこう。間違ってもいいからということだからの全港灣を担っていかないとけないぞ」と尻を叩いていただき



ました。

3日間という短い期間であったのですが、全港灣の歴史、現状そしてこれからを考えさせられる素晴らしい集会でした。各地方、全国に仲間が出来て皆で皆を助け合い闘い続ける労働組合という事を再確認し熱い思いで帰って来ました。これからも青対は続いていくので是非、皆さんに参加していただきたいと思います。

立ち上げられ青年部！

だんけつ

第322号 2018年8月20日



発行 行 1-12-27
大 阪 市 港 区 築 港 1-12-27
全 日 本 港 灣 労 働 組 合 関 西 地 方 大 阪 支 部
発 行 責 任 者 國 分 仁 昭

東アジア青年交流プロジェクト

熱い思いを後世に引き継ぐために

副委員長 小林勝彦

私にとって台湾は、仕事やプライベートで幾度となく訪れている最も親しみのある国である。その台湾に東アジア青年交流プロジェクト5カ年計画の最後の訪問地として7月6日～9日の4日間、私を含めた総勢16人で訪れた。

かつて何気なく行っていた台湾は「親日国」と称され、最も行きやすい国とされている。その理由は様々だろうが、今回の訪問で、真実の歴史に、少しでも触れることができた。

1895年の日清戦争後、下関条約によって日本の統治下に置かれ、抵抗する者には日本軍から凄まじい弾圧がなされ、日本がアジア太平洋戦争に敗れるまで、50年もの長期間、植民地支配されていた。

1930年、土地を略奪され、強制労働を強いられるなど、圧政の積み重ねにより原住民の怒りが爆発し「霧社事件」が起きた。多くの死傷者を出したこの事件は日本軍の総力をあげた攻撃によって鎮圧された。

この時に捕らわれた原住民は、警察による民族間同士の争いで半数近くが死亡した。これが「第2次霧社事件」で、生き残った原住民たちも首謀者たちは秘密裏に処刑された。

1937年、日中戦争が勃発し、日本軍の策略による皇民化運動が進み、太平洋戦争では日本兵と共に高砂義勇隊として戦争に巻き込まれて、日本のために戦うことを強制され、多くの犠牲者を出した。

1945年、日本の敗戦により戦争が終結すると、1949年からは外省人（中国大陆からの移住者）による国民党政権の下、戒厳令が敷かれ、その後38年間に渡り、政治活動や言論の自由は厳しく制限されることになる。

近年では1987年、学生たちが民主化運動を展開し、民進党による立憲政治の実現を要求する活動の結果、ついに戒厳令が解除となり自由と民主主義を取り戻す事となった。



今回の訪台で私が気になっていたのは電力事情である。第4原子力発電所の建設中止に至った経過を、現地で反対運動をされている方から聞く事ができた。「政府がこの場所に原子力発電所（東芝・日立製）を造ると知った1988年に地元の原発反対の会が結成され、それよりも16年も前の1972年に第1原発が起工され、この間、第2、第3原発が建設されていた。当時は戒厳令が発令されている事から反対集会やデモをするどころか声さえあげる事ができなかった。政府が土地を買収する際に原子力発電所と言わずに普通の発電所であると嘘の説明をしたり、テレビや

新聞のメディアまでも地元は賛成していると虚偽の報道までされていた。建設場所周辺の主な収入源は8割以上が漁業、残りが海水浴中心の観光がメインである事から海への汚染が起こればこの街は壊滅するとの思いで度重なる弾圧にも負けずに反対運動を進めてきた。

2000年これまで一緒に闘ってきた民進党へ政権交代がされてからは集会やデモで警察との衝突や弾圧が無くなった。」この様な闘いの経緯の説明がされたのち最も衝撃だった言葉が「我々は原子力と言えば広島・長崎を思い出す。そして、2011年3月11日の福島事故は衝撃でショックであり、我々の住んでいる台湾だけではなく、この地球を子供たちに残して行かなければならない！この運動を諦める事なく続けていくには、日本や各国の反対運動が続いている方との国際交流が必要だと考えています。」と、私たち以上に日本に注目しておられると感じました。

台湾政府のやり方も地元にお金を落としたり反対運動をしている市民に対しての弾圧を強行したり日本政府の手口と同じであるが、大きく違うのは国民が政権を変えたり、運動の中心が若い世代の人たちであるという事である！今後、平和で安心して暮らせる日本を後世に残すためには、運動自体を後世（若い世代）に引き継がなければならないと改めて考えさせられる訪台でした。